

# 「プロバビリティー」の葉書

影山 亮

学芸員の職に就いていると、アッと驚く（新発見）に出くわすことが稀にある。

それは二〇二〇年二月九日（水）だった。江戸川乱歩の没後五年に際して、さいたま文学館では「江戸川乱歩と獵奇耽異（Curiosity Hunting）」を企画、その担当学芸員として立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センターを訪れた。目的は乱歩のご令孫である平井憲太郎氏ご所蔵の資料、すなわち谷崎潤一郎が揮毫し、乱歩が愛蔵していた掛軸を借用すること。

掛軸の存在自体は知られていたものの、過去の乱歩に関する展示においては、一雙のみが展示されてきた（県立神奈川近代文学館「大乱歩展」図録には「二双一組」とキャプションにあるが、写真や展示は一雙のみ）。そこで当館では、初めて二双一組を並べて展示することにした。一雙には「うつりきてととせとなりぬ難波津の何にひかるるわれにかあるらむ」とある。関西

に移住して一〇年を過ぎた当時の谷崎の心境を詠んでいる。

もう一雙には「うばたまの夜のまほろし夢ならば昼見しかげを何といふらむ」とあり、乱歩の作品世界を詠んでいるとも推測できる。

さて冒頭の「新発見」は、この掛軸を桐箱から出す時だった。平井氏が蓋を開けながら、「昨日資料を確認したら、こんなものが一緒に入ってたんですよ」と仰ったのだ。それは谷崎から乱歩へ宛てられた葉書だった。これまで谷崎との書簡類は確認されていない。また現在までに八度刊行されている谷崎の全集や、選集にも未収録だ。まさに「新発見」であり、掛軸二双と共に、史上初めての展示となった。

文面は次の通りだ。

御丁寧なる御手昏拝承又何よりのもの御心にかけれ難有存候貴下の方が小生よりもずつと手筋も御上手のやうに拝見致候

悪筆今更恥しく存候  
乍略儀端書を以て御挨拶  
迄如斯御座候  
十二月八日

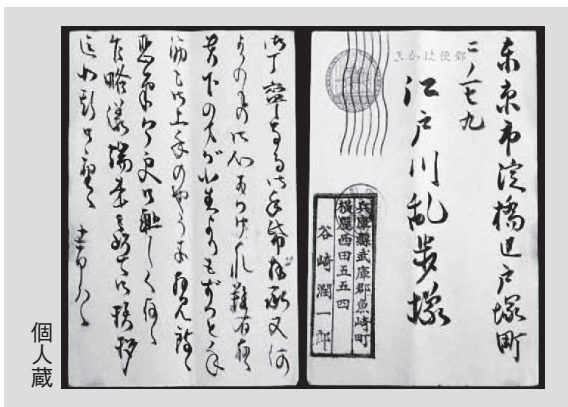
宛書面を見ると日付は不鮮明だが、

「御影 7・12」の消印を確認でき、一九三二年一月に発せられたと分かる。両者の当時の住所からも齟齬は生じない。乱歩は「探偵小説十年」（一九三二年五月）において「谷崎氏とは未だに面識がない。（略）逢ひ度いとは思はぬ。だがあの人の近頃の字が好きなので、それに作家として敬愛もしてゐるので、何か書いて貰つて床の間に懸けて置き度い様に思ふ」と述べている。しかし松村喜雄『乱歩おじさん江戸川乱歩論』（晶文社、一九九二年九月）には、「大衆探偵作家」という理由で断られ、のちに人を介して書いてもらったとある。たしかに新たに見つかった葉書の文面は、一見すると断りの内容と読める。しかし軸と共に保管されていたこと考慮すれば、本状と共に掛軸を贈つたとも仮定できる。すると本状の文面は、かねてより自身へ憧憬の情を示す後輩から書を請われた谷崎が、はにかみながら謙遜しつつも、それに応えたと読み取ることも可能だ

ろう。あるいは文面の「端書」という語も「紙片にするす覚え書き」という意味ではなく、「和歌などの初めに、その由来を書き添えたことば」と読み取ることは考えすぎだろうか。

乱歩と谷崎は志向した方向性は違えど、「プロバビリティーの犯罪」（『犯罪学雑誌』一九五四年二月）というモチーフに各々が興味を示したことは、あまりに有名だ。谷崎から乱歩へ宛てられた葉書が、断りとも謙遜とも読み取れるような「プロバビリティー」に満ちているのは、果たして偶然だろうか。

（さいたま文学館学芸員）



個人蔵